

1 節・当報告書の構成

当報告書は大きく5つの部分にわかれている。

1章において、調査対象の概要と調査自体の経緯について言及した。

2章において、解体実測調査で得られた、技法等の事項を報告した。

3章で、それら実測調査の成果を基にしながら、並行して行った文献および図面調査等の補足研究によって得られた知見を加え、復元考察他を行った。

4章において、それら考察に基づいた古径邸の史的評価を求めた。

巻末の5章において、付属資料の他、近代和風建築の技術史的研究の用に供するであろう各資料を収録した。

2 節・旧小林古径邸の概要および沿革

旧小林古径邸（以後古径邸と称する）は、建築家吉田五十八（よしだ・いそや、1894～1974）による設計と大工棟梁岡村仁三（おかむら・にぞう、1884～1972）の施工とによって、東京市大森區馬込¹⁾の画家小林古径の画室の脇に昭和9年に竣工した木造2階建の数寄屋造り住宅である²⁾。なお小林古径（こばやし・こけい、1883～1957）は、近代の日本画を代表する画家の一人である。

小林古径は大正9年から茅葺きの民家をベースにした画室をこの土地に構えていた。以後十数年間、大森新井宿の自宅から画室に通い筆を執っていたが、住宅と画室が相当離れていることに不便を感じるようになったため、隣地に住宅を建てることにし、その設計を吉田が引き受けたという。

小林が吉田に設計を依頼した経緯についての詳細な記録は、現在のところ伝わっていない。しかし小林とともに昭和5年に七絃会を組織した鐺木清方（かぶらぎ・きよかた、1878～1972）の住宅が、昭和7年に吉田の設計により竣工していることを考えると、おそらく鐺木を通じて吉田のことが小林に伝えられたとも思われる。またのちに、吉田自身が、横山大観（よこやま・たいかん、1868～1958）の住宅の設計をしていると述べている³⁾ことから、あるいは同じ再興日本美術院同人として横山から小林に、吉田の話が伝えられたとも考えられるが、現在刊行されている吉田の作品集には横山に関する建築施設は見あたらない。

古径邸の設計について、吉田は以下のようなエピソードを残している。

…なにせ有名な無口で、一日なにもしゃべらなくても平気だという先生のことで、設計に対してなんの注文も出ないのです。困りに困った末、やっとのことで間数だけははっきりしたのですが、どのような家を建ててよいやら、皆目わからないので、なんとか、見当だけつけたく、ある日、やっとのことで先生をつかまえて、先生はいった

いどんな家を建てたいのですか、と聞いてみますと、

「私にもよくわからないが、とにかく、私が好きだという家をつくってください」

と、まるで禅問答みたいな返事に、私もぎゃふんと、まいってしまいましたのです。…

「数寄屋十話」第六話 毎日新聞⁹⁾

結果、この住宅は隣地の茅葺きの画室との調和を考慮して、「京都八瀬大原方面の民家建築の手法を取り入れ、しかも近代的な構想と共に明朗閑雅なしかして近代生活にも適するように設計された民家趣味の新日本住宅」と評された⁵⁾住宅として竣工する。その後、隣接する画室が、光線の不足と間取りの不便さを改善すべく、昭和11年ごろに吉田の設計により、大きな改造が加えられた。戦後になって、小林が昭和32年4月に74歳で亡くなったため、昭和35年に住宅・画室を含む約750坪の土地が、医業を営んでいた榊邦彦氏に住宅として売却された。その後、昭和49年榊家の相続にともない土地の約半分を大田区に売却処分した際に、その土地にまたがっていた画室の方が取り壊されたため、画室部分の状況は解体調査時すでに、平面図と数点の写真⁶⁾によってしか、うかがい知ることができなくなっていた。なお、売却された土地には、現在児童公園と児童館が建設されている。

現存していた住宅部分は吉田が30代後半から40代にかけての、彼の和風建築設計の経験にとって初期にあたる、しかも現存する当時の数少ない作品でもあった。後に、いわゆる吉田流と称される「近代数寄屋」あるいは「新興数寄屋」のスタイルがまだ確立されておらず、伝統的な数寄屋の手法を積極的に学びとろうとする姿勢をこの住宅に見ることができる。しかしながら一方で、彼のスタイルがかたちをなす途上の姿を示す、さまざまな試みも垣間みられる作品として、この住宅をまず評価することができる。

数寄屋大工岡村仁三によって行われた古径邸の施工においては、今回の解体実測調査によって確認された、ボルトを用いた鴨居調整などの創意ある新工夫がいくつか散見された。これらは当時における一般的な木造技術とは異質な面を持っており、伝統と新手法との併存という古径邸の特徴は、これら技術的な面においても特に言及されるべきである。また、建築家の構想力を保証した当時の施工技術を体現する遺構としても、貴重である。

平面は解体時で1階が約43坪、2階が約20坪、のべにして約63坪の規模を持つ。1階平面は当時の中流以上の都市型住宅の基本形であった中廊下式⁷⁾を踏襲し、東側玄関と中廊下を軸として、南側に客間・茶の間・居間、北側に台所・水廻り・女中室を配している。2階は雪見障子付の座敷3室で、主に構成されている。これらの平面構成からうかがえるように、古径邸は昭和初期の都市における文化人のための住宅の一好例としての史的意義をも有している。